

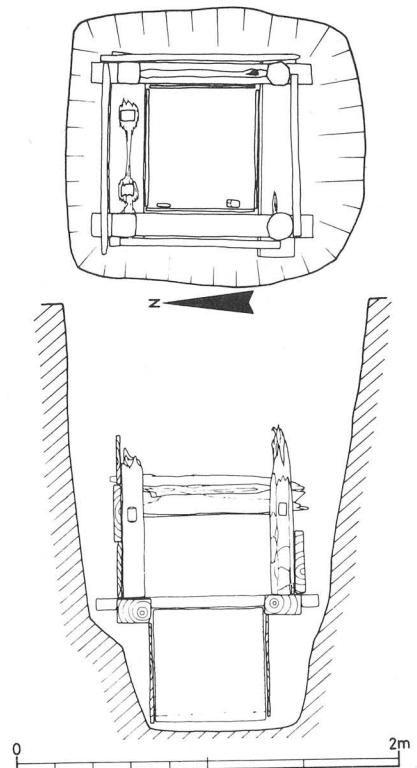
奥山久米寺（C地点）の調査

（昭和53年9月）

この調査は、家屋新築工事に伴って実施したものである。調査地は、奥山久米寺塔跡の東南方約100mの水田中に位置する。調査では、現地表下60cmにある暗褐色砂質土上面で井戸1基を検出した。井戸は1辺1.5m、深さ2.1mの掘形をもち、内部に2段構造の井戸枠を残していた。上段の井戸枠は、井桁に組んだ土居桁を基礎とし、その四隅に立てた柱によって横板の側板を積み上げる構造をもち、内法は方97cm。横板は長さ約1m、幅30cm、厚さ3～5cmであり、北側3段分、他の3方は2段分をとどめる。隅柱には角・不整八角・円などの断面をもち径12cm前後の材を用い、各々を横棧でつなぐ。土居桁は角材を相欠きの仕口で組合わせたものであり、南と北の材は幅18cm、厚さ13cm、東と西の材は幅12cm、厚さ12cmある。土居桁の四隅には、隅柱をうける納穴が穿たれている。

下段の井戸枠は、土居桁の内辺下方に一辺60cm、厚さ2cmの板を横方向に素組みするもので、とくに接合のための仕口はなく、内側に打込んだ杭でとめている。下端は10cm大の礫を敷く井戸底面に接する。下段の枠組は、井戸の「めだま」に相当するものであろう。

井戸埋土は、8世紀末頃の土器を含む上層と、藤原宮期の土器を多量に含む下層とに分かれる。下層には8世紀中頃の土器も少量含まれるから、この井戸が、藤原宮期に作られ、8世紀末頃に放棄埋没されたことがわかる。井戸については、奥山久米寺との関連が考えられるが、詳細は不明である。



井戸実測図（1：40）